Osaka University Knowledge Archive

Title	視覚コミュニケーション論研究　モホリ＝ナギ／ケペッシュの視覚言語論を中心に
Author(s)	金, 相美
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57903
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【9】

氏　　名	金（きむ）　相（さん）　美（み）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２３３２２　号
学位授与年月日	平成21年 9 月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	視覚コミュニケーション論研究　モホリ＝ナギ／ケペッシュの視覚言語論を中心に
論文審査委員	(主査) 教　授　藤田　治彦 (副査) 教　授　上倉　庸敬　　准教授　三宅　祥雄

論文内容の要旨

本論文は、造形教育者・思想家ラスロー・モホリ＝ナギ（Laszlo Moholy-Nagy, 1895-1946）と、彼の実践的協力者・後継者であるジョージ・ケペッシュ（Gyorgy Kepes, 1906-2001）の造形理論を視覚コミュニケーション論の立場から検証し、その有効性と限界を明らかにしようとしたものである。これまでモホリ＝ナギは、1923年から28年までの間にドイツのバウハウスで教育や出版に携わっていたことから、合理主義的かつ機能主義的なデザイン思想家として取り上げられ、彼自身の作品や人的交流から、20世紀の前衛的芸術家のひとりとして注目されることが多かった。先行研究の多くは、

バウハウスとの関連におけるモホリ＝ナギ、またはキュビスム、未来派、ロシア構成主義といった特定の主義（ism）からみたモホリ＝ナギを、それぞれの観点から調査分析したものである。本研究は、歴史性や特定の主義からの視点を離れ、その理論を中心に造形論の検討を行い、モホリ＝ナギの「視覚現象におけるコミュニケーション原理」の抽出に努めている。第一章では、バウハウス「予備課程」でのモホリ＝ナギの役割を確認し、そこにおける彼の造形思想を明らかにした。第二章では、前章で確認したモホリ＝ナギの造形思想をもとに、モホリ＝ナギとケペッシュがアメリカのニューバウハウスで行った実践を、ケペッシュの著書『視覚言語 Language of Vision』を中心に検討した。同書は、彼らの造形思想を思弁的に語るのではなく、事例を提示しつつ、具体的かつ普遍的な造形理論を導き出していると評価している。第三章では、第二章で抽出された「視覚言語論」すなわち「視覚現象におけるコミュニケーション原理」の有効性と限界について検討している。その方法として「モホリ＝ナギ/ケペッシュの視覚言語論」、「パース/モリスの記号論」、「グッドマンのシンボル論」を取り上げ、それぞれの補完可能性、またはアンチテーゼとしての代替可能性について考察している。さらに、本文で論じられた理論や原理を検証するため、各章の最後ではいくつかの実作例を取り上げ、分析を行っている。以上の考察を通じて、「モホリ＝ナギ/ケペッシュの視覚言語論」は「パース/モリスの記号論」や「グッドマンのシンボル論」と同じく人間を主体とする「認識の問題」を扱った理論であることが確認された。しかし「モホリ＝ナギ/ケペッシュの視覚言語論」と「グッドマンのシンボル論」は同じく「認識の問題」を基盤としながらも、異なる結論を導き出していると論じている。

論文審査の結果の要旨

ラスロー・モホリ＝ナギは、20 世紀を生きた総合的人間であり、バウハウスでの活動がそのおもな業績とされてきた。しかし、本論文の最大の特徴は、彼をその種の従来の評価枠から切り離し、その造形理論を「視覚言語論」として位置付けていることである。本論では、モホリ＝ナギがバウハウス「予備課程」で光学現象の実験による空間と位置の感覚の強化を試みたことは、その関心が視覚とその構築可能性の探究にあったことを示し、彼の造形理論の基礎を成すものだと位置付けている。言語によるコミュニケーションと同様、「視覚言語論」つまり視覚伝達においても一定のリテラシーが働くという考えは存在していたが、そこでは個別例が示されるばかりで、有効なまとまりを持たなかった。

モホリ＝ナギとケペッシュは、視覚的リテラシーの基本的原理の発見に努め、その成果として、後者は著書『視覚言語』を著し、彼らの実践と理論はその先駆性と具体性において高く評価される。しかし、本論文の著者は、彼らの実践を「視覚言語論」と名付け、評価するだけでなく、「パース/モリスの記号論」と「グッドマンのシンボル論」との比較検討を行い、その有用性と限界をともに明らかにしている。「モホリ＝ナギ/ケペッシュの視覚言語論」は複数のレベルや局面を想定しているため、印象とは異なり、複雑である。つまり、形態論（morphology）、構文論（syntax）、語用論（pragmatics）といった下位レベルでの分析を、必要に応じて再度融合させる必要がある。一方、「グッドマンのシンボル論」は表れた結果をすべて人間の認識に起因させるため、下位レベルでの分析や融合の過程を必要としない。しかし、一見大胆で魅力的なグッドマンの理論は還元論の欠点を伴う。このような還元主義は「視覚現象におけるコミュニケーション原理」を明らかにするどころか、無効にさせる。「モホリ＝ナギ/ケペッシュの視覚言語論」の多重構造には、改善の余地があるものの、言葉の言語の構造と同様に還元論に陥っておらず、まさに視覚の言語とその研究のこれからの方向性が示されている。

以上のように、本研究は「モホリ＝ナギ/ケペッシュの視覚言語論」の見直しと積極的な適用を提案している。日々数えきれないほどの造形イメージがつくり出される今日の状況を考えれば、「モホリ＝ナギ/ケペッシュの視覚言語論」の有効性と限界を理解し、発展の可能性を探究していくことは非常に重要なことであり、本研究はその先駆的研究として高く評価されるものである。以上のような理由から、本論文は、博士（文学）の学位にふさわしい学術的価値を有するものと認定する。